

春は、喜びの季節であると同時に、別れの季節でもあります。ひなまつりは、結婚式の情景と言われます。めでたいながら、住み慣れた家と、愛する父母の元を離れる、悲しく秘めた胸の内が、曲の哀愁には込められているのかもしれない。

新しい変化の兆し

春は胎動の季節、変化の兆しを迎える時です。そこには、湧き上がる喜びと同時に、今までの状態の終わりを告げる、引き裂かれるような思いが、同居しています。

そのような視点から、レントの「最後の晚餐」の場面を黙想するとき、より一層イエス様の弟子たちに残したメッセージが、深く味わえると思うのです。

弟子たちは、関係の継続を望んでいました。発展と繁栄を夢見ていました。イエス様の聖都入場の歓声は、ほんの序曲で、このお方ならエルサレムの王座に立つこともできるかもしれない、と期待していました。そして、かつての惨めな生活や、苦しい思いが、見返せると野望を抱いたのです。しかし、そうはなりませんでした。

イエス様は、確かに救い主としての使命を果たすために、エルサレムに入場されました。しかしそれは、弟子たちとの関係の終わりであり、暴力による殺害を受け入れるためでした。新しい変化は、暗闇の手に、引き渡されるという運命だったのです。最後の晚餐で、「お別れだ、でもまた必ずまた会おう」と告げられたのは、彼らに、ピリオドを示し、今共にいる意味を教えているのです。イエス様の、別れの言葉は、悲しみではなく、新しい約束という不思議な力に満ちています。

必ずまた会おう

「素晴らしい時は、やがて去り行き、今は別れを惜しみながら、共に過ごした喜びを、いつかまた・・・会える日まで」倉品正二の「さようなら」を思い出すと、涙ながらに卒業式を送った学生時代を思い出します。イエス様と弟子たちの別れは、麗しいものではなく、イスカリオテのユダの裏切りという過ちと、茨の冠と歴史上最も残酷な処刑を、ガイコツの丘で実行されるという、壮絶なものでした。それなのに、イエス様は、みんなで輝く日が来る、その時には天国で新しいワインを開けよう。その時までは、これが地上の最後の一杯だ、とユーモアさえ感じる言葉を語り、どんな別れの曲よりも素晴らしい、賛美を歌って、油しぼりの山に向かわれたのです。

はるか昔、イスラエルの民は、奴隷の国エジプトから脱出しました。その記念の祭りが「過越祭」です。「最後の晚餐」がこの過越の祭りの食事であったことは、決して偶然ではないでしょう。私たちの主は、十字架の購いが、この地上では別れとピリオドがあること、そしてその先に必ずまた会える日が来ることを、この春にもまた、教えています。わたしが置かれた場所の意味、果たすべき使命はなんのでしょうか？